

## 大久野島のアナウサギ対策

国立公園課・野生生物課連携事業

### (1) 種名(学名)

アナウサギ (*Oryctolagus cuniculus*)  
(イベリア半島(スペイン・ポルトガル等)  
原産。家畜化・品種改良されたアナウサギを  
カイウサギまたはイエウサギと呼びます。)



### (2) 生態・生息状況など(山田, 2019)

- ・主に、繁殖のため地下に掘った穴や地表の  
巣で生活し、なわばりを持ちコロニーをつ  
くります。
- ・草本類、木本類の葉・枝・樹皮などを食べる草食性です。
- ・一年を通して繁殖可能で、年に3~5回、1産に1~9頭の子を産む繁殖力の高い動物  
です。
- ・アナウサギは、日本の在来種であるニホンノウサギ、アマミノクロウサギ等とは異な  
り、イベリア半島原産の外来種です。大久野島に生息するアナウサギも、人為的に導  
入され野生化したものです。
- ・国内では、大久野島を含め令和元年(2019年)現在で11の島で野生化したアナウサ  
ギが確認されており、大久野島以外はすべて離島の無人島です。島の植生への被害や  
海鳥類への繁殖阻害が生じたことから駆除が行われた事例(七ツ島大島(石川県))  
もあり、環境省が平成27年度(2015年)に作成した「生態系被害防止外来種リス  
ト」で、アナウサギは「重点対策外来種」とされています。
- ・世界各地でもアナウサギが野生化して、生態系や農林業への被害を及ぼす事例が多く  
確認されており、IUCN(国際自然保護連合)により「世界の侵略的外来種ワースト100」  
に選ばれています。

### (3) 導入の背景・対策の経緯

- ・大久野島のアナウサギは、昭和40年代に島外から人為的に持ち込まれたものから  
始まると言われています。その後も、アナウサギの島内への遺棄が繰り返され、現  
在は様々な毛並、毛色の個体があります。
- ・近年は、野生状態に近いアナウサギと身近にふれあえる『ウサギ島』として有名に  
なり、国内外から多くの利用者が訪れています(大久野島への観光客数：平成21年  
(2009年)に約13万人 平成29年(2017年)に約36万人(竹原市統計))。来  
島者の多くはウサギとのふれあいを目的としているため、なかには大量の餌(野菜

やペレット等)を持ち込んで餌やりをしている利用者もいて、アナウサギの個体数も増加傾向にあります。

- ・ アナウサギに起因する感染症や咬傷事故等の利用者の安全上のリスク、食べ残した餌による衛生上の問題等、様々な課題が生じています。
- ・ 大久野島は、ほぼ全島が環境省所管地で、瀬戸内海国立公園の集団施設地区に指定されています。
- ・ アナウサギを重要な観光資源と位置付けている地元自治体や観光業者等、また、動物愛護の観点からアナウサギの取扱いについて関係業者等に働きかけを行っている公園利用者等様々な立場の関係者がいます。こうした関係者間で課題や問題意識を共有しつつ個別課題の解決に向けて合意形成を図り具体的な取組につなげていく必要があります。

#### (4) 分布状況の概要

- ・ 平成30年(2018年)に実施した調査に基づく推定個体数は920頭以上です。

##### 【参考】

H18(2006) 約300頭(大久野島ビジターセンター調べ[ルートセンサス])

H25(2013) 約730頭以上( " )

H27(2015) 約750頭~1,000頭(Demello et al. 2016)

H30(2018) 920頭以上(大久野島ビジターセンター調べ[ルートセンサス])

- ・ 第2棧橋から休暇村大久野島までの区域に多く、山林内では数が少ない傾向がありますが、島全域に生息しています。

#### (5) 中国四国地方環境事務所の取組

##### 平成30年度(2018年度)

- ・ 人獣共通感染症等のリスク、アナウサギの疾病・負傷の状況、アナウサギの個体数管理の方法等について、各分野の専門家にヒアリングを実施しました。
- ・ 島の関係者やアナウサギの保護・観察を行う公園利用者にヒアリングし、アナウサギとの関わり方や来島者によるエサやりの現状等、課題を調査しました。
- ・ アナウサギの生息数を把握するため、平成30年(2018年)6月~7月にかけてルートセンサスを計4回行い、最大921頭を確認しました。
- ・ 感染症を媒介するネズミ等の動物やアナウサギの健康状態の疫学調査を山口大学に依頼して行いました。調査の結果、アナウサギの個体間で広がるウサギ梅毒、人獣共通感染症であるE型肝炎ウイルスや日本脳炎ウイルス等の各種感染症の抗体が検出されました。
- ・ 来島者へのアンケート調査により島の感想や利用上の課題について把握しました。

##### 令和元年度(2019年度)

- ・ 島関係者や公募参加者に集まっていただき「大久野島・未来づくりワークショップ」

を開催して課題やリスクの整理と共有を図りました。4回のワークショップにより59の課題と37の優先的に検討していく項目が示され、課題解決に向けた方向性をとりまとめました（「大久野島未来づくりノート」を参照）。

令和2年度以降（2020年度）

- ・これまでの議論を引継いで、具体的な方針と対策を検討し、取り組みにつなげていく計画です。

## （6）課題

### 1．人獣共通感染症や咬傷被害による人へのリスク

アナウサギとの触れ合いを通じて人獣共通感染症による疾病リスクがあるほか、餌付け時に手を咬まれる事故が増えているとの報告もあります。

E型肝炎、日本脳炎、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）（マダニによるウイルス感染）、その他人獣共通感染症等

### 2．アナウサギ個体群への影響

生息密度の増加に伴い、アナウサギ同士の争いによる負傷や、アナウサギ間で広がる呼吸器疾患、ウサギ梅毒等が蔓延するおそれがあります。また、アナウサギの傷害事故（抱き上げたアナウサギを誤って落とす事故、自転車との衝突事故等）も増加しています。

### 3．餌の放置による問題

- ・風致上及び衛生上の支障

大久野島を訪れる公園利用者が毎日のように給餌しており、一度にたくさんの量の餌を持ち込む人もいます。このため、アナウサギが食べきれない餌が散乱し、風致上の支障となっており、また腐敗して不衛生な状態になっていることもあります。さらに、無断で設置されたアナウサギの水飲み容器は蚊（ヒトスジシマカ）が発生する原因となり、蚊が媒介するデング熱の疾病リスクも懸念されています。

- ・他の生物への間接的餌付けの問題

アナウサギが残した餌を在来種のイノシシやネズミ（外来種のイエネズミ）が食べて、これらの個体数が増加しているとの報告があります。増えたイノシシが人を襲うおそれやイエネズミによる衛生上の問題を引き起こすおそれがあります。

### 4．植生の衰退や法面の崩壊等のリスク

- ・島内の自然植生への顕著な被害として、既に下層植生が失われており、また稚樹が育ちにくい状況になっています。この状態が長く続くと、生態系被害が深刻化するおそれもあります。また、専門家によるとアナウサギの好まない植物（キョウチクトウ、キツタ、クサギ等）が残っている傾向があるようです。
- ・斜面に作られたアナウサギの巣穴により、法面崩落のリスクや施設への影響のおそれ等の問題も生じています。

まとめ（人からアナウサギへの干渉がもたらす問題）

- ・ 以上のように、所有者のいない野生化したアナウサギへの安易な餌やりは、人獣共通感染症や咬傷事故の発生による人の安全を脅かすおそれや、個体数の急増と過密化によるアナウサギの病気やケガの蔓延、他の動物や周辺環境への影響など様々な問題を引き起こします。アナウサギのために善意で行った行為が、結果としてアナウサギ自身に悪影響を及ぼすこともあります。
- ・ 島へのアナウサギの遺棄は、アナウサギの生息数をさらに増加させ、上に述べた様々な問題をさらに悪化させます。動物の遺棄は動物愛護管理法に抵触するおそれもあります。

（ 7 ） その他（参考文献、HP 等）

大久野島・未来づくりワークショップ HP（中国四国地方環境事務所 HP）:

[http://chushikoku.env.go.jp/nature/mat/post\\_21.html](http://chushikoku.env.go.jp/nature/mat/post_21.html)

野生化カイウサギの生態や問題（山田，2019）大久野島勉強会（191126）発表資料

<http://chushikoku.env.go.jp/lecture2.pdf>

大久野島未来づくりノート（ワークショップのとりまとめ）

<http://chushikoku.env.go.jp/note.pdf>

生態系被害防止外来種リスト

<http://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>

世界の侵略的外来種ワースト 100

<https://www.iucn.org/content/100-worlds-worst-invasive-alien-species-a-selection-global-invasive-species-database>

Demello, M., C. Bugir., K. Hoshina and K. Takahashi. 2016. The rabbits of Okunoshima: Rewilding the domestic or domesticating the wild? Abstracts of the 5<sup>th</sup> World Lagomorph Conference: 84.